

## 『われから』におけるジェンダー観

—言語行為の多層性を手がかりにして

笹 川 洋 子

一 はじめに

『われから』は一葉最後の作品である。一八九八年（明治二九年）五月に『文芸倶楽部』に発表された。物語の主人公は、美貌の人妻町である。彼女は、亡くなった父親から財産を受け継ぎ、政治家の金村恭助を婿に迎えた。それから十余年たった今も子供がなく、町は芸者好みの身なりをし、華やかな調度に囲まれて、勝手気ままに暮らしている。ある冬の夜更け、町は書生千葉の部屋に行き、一語りして、寒かろうと羽織を千葉の肩にかけて部屋を出る。町の母、美尾も際だって美しかったが、町の父、與四郎との貧しい生活に飽きたらず、母親と共々、おそらくは従三位の軍人様の元に去る。町はある日、奉公人たちのうわさ話を聞く。夫恭助が飯田町に幼なじみのお波という、町とは対照的な清楚な女性を妾として囲い、しかも十一歳の男の子までいるというのだ。翌日、恭助から十一歳の男の子を養子にという話を切り出され、精神的に不安定になった町は、激しい癪をおこすようになる。そんな時、奉公人の福は、ねらっていた結城紬をもらいそこなったことで、町に恨みを抱き、町の介抱をする千葉と町の間がやましいという噂を立てる。不用意な町の行動に恭助は悩むが、世間の噂は既に大きくなっており、町に別居を言い渡す。

この物語の執筆にあたっては、膨大な量の未定稿が残されており、一葉が苦慮したことが推測できるが、かつて『たけくらべ』を絶賛した『めさまし草』ではこれまでの一葉作品に及ぶべくもない、「一葉としては太く劣りたる作なり（小説通）」と酷評されている。しかし、時を経た現代という時点から『われから』を眺めてみると、一葉の鋭敏なジェンダー観やその描写方法の斬新さに気づく。田岡嶺雲は、『われから』の発表直後の明治期にありながら、「男子自ら貞操ならずして、女子に嚴重なる貞操を求むるの酷なるを責め、女子の境遇の憐れむべきを示せしならむ」と一葉の意図に言及している。さらに、藪楨子、菅聡子は二〇〇三年の対談で、一葉は「両性にわたるジェンダーの問題」を総合化、相対化して作品に盛り込んでいたのではないかと語っている。『われから』には、美尾と町、與四郎や恭助、美尾の母親、福、千葉、奉公人たち、名もない人々、そして物語の語り手と多様な言語行為が重なり、ポリフォニー（多声性）を生み出している。本稿では、対立、拮抗、調和など、さまざまに蠢くこれらの言語行為を読み込むことで、その多層性の収斂する行方を探り、小説にこめられた一葉の意図を明らかにしたいと思う。

## 二 『われから』をめぐる論議—美尾と町の物語における対比性と類似性

まず、『われから』をめぐる先行研究を整理したい。ここでは、趙恵淑（二〇〇七）に倣い、先行研究を大きく二つに分ける。第一に、娘町子の物語に、母美尾の物語が挿入される入れ子型になった物語構造の類似性、対比性をめぐる論議、第二に、物語構造の解釈に関連して、町子と書生千葉の間に実事があったかどうかを問うものである。趙恵淑（前掲書）は、『われから』は八〇年代までは、町と千葉の間に実事があり、美尾から町への放蕩の遺伝の物語として読まれてきたが、近年は美尾と町の二つの物語構造に類似性、あるいは対比性を見いだす論議が導入されるようになったと記す。物語構造を分析することにより、一葉の創作意図に言及し、この物語の解釈可能性

に迫ることができると考えられる。ただし、本稿では、実事についての議論は、物語構造を巡る議論に付随する論点であるとし、物語構造についての先行研究の解釈を中心に整理し、その論考の過程で実事についての論議を扱いたいと思う。ここでは、『われから』の物語を二つの物語の類似性から解釈する理論と、反対に対比性から分析する論に分け、整理してみることにしよう。

第一に、『われから』の二つの物語の構造に類似性をみる論議について、塚本章子（二〇〇九）は、まず、母に続き娘も不義を犯すという「遺伝」や「血の宿命」を見る論、次に、二組の夫婦の破綻への過程を見る論、そして、「夫との関係の中で身悶えしている」母娘の二つの物語と見る論、さらに「旧道徳に対決しようとした悲壮さ」や「抵抗」を見る論に分けている。いずれも美尾物語と町物語の類似性に言及するものである。

まず、はじめの「遺伝」を指摘する論は、湯地孝（一九二六）の「彼の女の（町の）我儘で遺伝的な性格、主として性的に放任的な性格が崗じて遂に身を誤るに至った経緯を描いたものである」で示され、その後前田愛（一九七九）等多くの研究者が「淫蕩な母親の血」の遺伝を小説の主題と読む立場を継承している。

次に、夫婦関係の破綻や妻の苦悩という「夫婦関係」に物語の主題を見いだす論がある。「美尾の物語と町子の物語は、ともに『家』のソフトとハードとの統一を求めて得られず、戸籍上の妻の地位だけが残ったという点において一対の物語になって」いる（高田知波、一九九七）。「境遇の異なる二女性を通して」「妻である女が人形扱いされることを拒否して、精神と肉体をもつ人間である女として充足した生き方を求めて模索する苦悩を描いた」（渡辺澄子、一九九四）。「二組の夫婦の破綻への過程を重層的に描きながら」「夫や世間の思惑が錯綜する中で封じられていった妻の声の行方を追っていった」（戸松泉、一九九五）。いずれも妻の地位に焦点をあてている。

最後に、社会への抵抗の視点を読み取る第三の論があげられる。例えば、「社会からの逸脱」を指摘する論として、『外部の声』に囲繞された女たちの逸脱のドラマ（関口礼子、一九八六）、「『心のそこ』に満たされぬもの

を抱え込み、日常的な生から逸脱していつてしまうような女主人公（峯村至津子、一九九五）があげられよう。また、大畑照美（二〇〇一）は「孤独」に注目し、「『われから』の世界を貫いているもの」として「世間からも取り残されていく限らない孤独」としている。さらに、社会の不合理を『われから』の主題を述べた、「女らしさを振りすてた点に旧道徳に対決しようとした悲壮さが見えて、彼女の躍進が見える（塩田良平、一九五六）」、「結末あたりは漸く一葉が面をあげて旧道徳に対決し、男性や世俗に対する抵抗をあらわにして」「世の不合理を突いたもの」（坂本政親、一九五九）、「（イエとウチの）崩壊の問題、財産権の問題、愛と性の問題を提出し」、「女性の在り方生き方を考え、女性の立場の向上を訴えている（青木一男、二〇〇三）、等の論がある。これは、本論の冒頭にあげた田岡嶺雲の「女子の境遇の憐れむべきを示せしならむ」という考えとも通じる。

では、第二の美尾と町の物語が対比されるものとして書かれたという論を見てみよう。まず、滝藤満義（一九九八）は、それまでの「男を捨てる女、男に捨てられる女の二系列」を合わせたと述べる。また、藪楨子（一九九一）は「愛が貧困によって裏切られる形と、愛の不在が富や名誉を無化する跡を対照的にみせている」としている。千田かをり（一九九三）は、「はたと白睨む」町子は「身体が言葉と同等にものを言うことを自覚した」（「美尾は」）身体の商品性、流通性には自覚的であったが、表現媒体としての身体には気づかなかった「身体にかんする意識の差異、身体とのかかわり方の差異を明らかにするためには、美尾、町子とも必要だった」と記す。さらに、五島慶一（二〇〇一）は「模範的な在り方から何らかの原因で逸脱していった女たち」「家を出て行く妻」である「美尾の物語は十分な精彩をもって描かれ」、「家を追われる妻」である「町の夫れを（逆）照射するものとして大きな意味を持つ」と、「家を出て行く妻」「家を追われる妻」という対称性を物語に読み込んでいる。いずれも、一葉の二人の女性を対照的に描く意図を『われから』に見いだしている。

このように、『われから』の解釈は多様であり、言い換えれば、先行研究にあるように、この二つの物語には

様々な位相で、類似性、対称性が組み込まれているということができよう。そして、一葉独特の曖昧な余韻を持たせる表現がさらに物語の解釈を難しくしている。しかし、一葉が目論んだであろう、この多元性、多層性を読み、その上で一葉の意図を検討していく試みは十分行われているとは言えない。そこで、ここではまず、一葉が題名に選んだ「われから」という言葉を手がかりに、この物語の解釈の多層性を考え、さらに主人公たちの言語行為を見ていくことで、言語行為の多層性、さらにそれらが収斂していく先にある、一葉の意図したであろうジェンダーの問題を探りたい。

### 三 「われから」という語の多層性

古典の素養のあった一葉は、自らの作品に古典のモチーフを忍ばせたと<sup>（注3）</sup>言われる。この『われから』の人物造形、場面構成にも西鶴、近松、古くは源氏物語の影響が指摘されている。ここでは、一葉がこの作品の題名とした「われから」という一片の語を、古典の和歌から拾い、『われから』の主題を探る手がかりとしたい。

「われから」という語彙はいくつかの和歌に散見される。和田芳恵（一九七〇）は題名の由来として『古今集』巻一五恋五、典侍藤原直子朝臣「あまの刈る藻にすむ虫のわれからと音をこそ泣かめ世をばうらみじ」を引いている。この歌は伊勢物語六五段にも既出している。歌の意は、「私は海人の刈る海藻に住む虫の『われから（割れ殻）』のようだ。みな自分自身が原因なのだと思い、声をあげて泣こう。あの人（世の人）を恨むまい」と解釈される。なお、「われから」は海藻などに付着している甲殻類の虫で、乾くにつれて殻が割れるというという説がある。さらに、この言葉は我から、すなわち「我が身ゆえに」の意と掛けられている。また、「世」は「世の人」、あるいは恋う相手である「あの人」と解釈することができる。ここでは、まず「世の中の人」という読みから、次に「あの人」という読みからと、二つの視点から、この和歌に重ねられた『われから』の主題の意味を考えてみたい。

「世の人」という言葉から思い起こされるのが、「與四郎が妻の美尾とても一つは世間の持上しなり」という美尾の悲劇を語る、物語の語り手の言葉である。美尾は身分は高くないが誠実な夫の心を嬉しく思い、六疊、四疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て、買ってもらった洋銀の指輪を大事そうにはめ、馬爪のさし櫛も本鼈甲の品のよきに嬉しがった。しかし、人は美尾の美貌を褒め、不釣り合いな貧しい様子を嘲笑う。

見る人毎に賞めそやして、これほどの容貌を埋れ木とは可憎しいもの、出て居る人で有うなら恐らく島原切つての美人、比べ物はあるまいとて口に税が出ねば我おもしろに人の女房を評したてる白痴もあり、豆腐かふとて岡持さげて表へ出れば、通りすがりの若い輩に振かへられて、惜しい女に服粧が悪いなど哄然と笑はれる、思へば綿銘仙の糸の寄りしに色の褪めたる紫めりんすの幅挟き帯、八圓どりの等外が妻としては是れより以上に粧はるべきならねども、若き心には情なく緬のゆるびし岡持に豆腐の露のしたゝるよりも不覺に袖をやしぼりけん

物語の語り手は、自分の貧しい境遇を捨て去った美尾の悲劇は、彼女自身のせいではなく、世の人が原因だと言っている。同じく町の悲劇でも世の人のほめそやす声が罪を作ったように語り手は語る。

お高祖頭巾に肩掛引まとひ、良人の君もろ共川崎の大師に参詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何處のぞ有らうと囁かれて、奥様とも言はれぬる身ながら是れを淺からず嬉しうて、いつしか好みも其様に、一つは容貌のさせし業なり。

また、夫恭助に十年來連れ添った妾と十歳の子供がいることを知った町は激しい癪を起こすようになる。それが町の耳に入ったのは、奉公人たちの何気ない噂話である。そして、町に恩義を感じている千葉が彼女を介抱するが、それが醜聞となって、二週間にも満たない短期間で、瞬く間に広がっていき、町を追い詰める。

其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立て、反かへる背を押へさするに、武骨一遍律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく、しのびやかな囁き、頓て無沙汰に成るぞかし。隠れの方の六疊をば人奥様の癪部屋と名付けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目がらかや、此間の事いぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ取添へて、仰々しくも成ぬるかな、あとなき風も騒ぐ世に忍ぶが原の虫の聲、露ほどの事あらはれて、奥様いと憂き身に成りぬ。

中働きの福かねてあらく心組みの、奥様お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろく千葉の厄介に成たればとて、これを新年着に仕立て、遣はされし、其恨み骨髓に徹りて、それよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉らへて珍事唯今出來の顔つきに、例の口車くるくとやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん

このように、物語の語り手は、町と美尾の悲劇は世の人の何気ない噂話により創り出されたものだと繰り返し語っている。「私は海人の刈る海藻に住む虫の「われから（割れ殻）」のようだ。みな自分自身が原因なのだと思います、声をあげて泣こう。あの人（世の人）を恨むまい」という歌は、人の声に追い詰められた、町と美尾の境遇と重なる。

しかし、前述したように、世の人は「あの人（恋の相手）」と解釈することもできる。そして、題名の「われか

ら（割れ殻）に象徵されるのは、愛妻の実尾に裏切られ、「五十に足らぬ生涯、死灰のように終わりたる」與四郎であり、「生涯あはれなる事いふはかりなく」、「浮世の捨て物」とされる町である。しかし、「我が身ゆえに」あの人を恨むまいというような諦念は二人にはない。與四郎の実尾に対する怒りは凄まじく、また「我れをば捨て、御覽ぜよ、一念が御座りますとて、はたと白睨む」町も割れ殻になるような運命を静かに受け入れるとは思えない。むしろ、この和歌の諦念は、赤鬼と呼ばれた與四郎や、夫に別居を言い渡された町子の言動と比べると、まさに対極に位置する。和歌では「悲しみ」や「あきらめ」という受動的な感情が主題となるが、一葉の小説では「決」や「苦悶」という激しい感情が立ち上がってくるからである。

もう一つ、関礼子（二〇〇一）の言及している伊勢物語五七段の歌を見よう。「むかし男人知れぬもの思ひけりつれなき人のもとに）恋ひわびぬあまの刈る藻に宿るてふ、われから身をもくだきつるかな」。男はある女に秘めた恋をしたが女はつれなかった。そこで、歌を詠んで贈った。「私は恋ひ悩んでいます。海人が刈る海藻に宿っている『われから』のやうに。誰のせいでもなく、自分のせいで、身も心も碎いてしまった」。この歌の方が『われから』で表現されている美尾に逃げられた與四郎と、恭助に振り向かれない町子に似つかわしい。さらに関礼子（前掲書）は「とにかくにわれから物を思ふかな身より外なるところならねば（『新後撰和歌集』雑中・左近中将具氏）」を典拠を考える際の参照例に引いている。「いずれにせよ、自分から思ったことだ。身とは違ふところにある心ではないか」。この歌も貧しい境遇に心満たされない美尾、贅沢に暮らしながらも心に大きな不安を抱えている町にふさわしい。

このように「われから」という題名一つとっても、美尾と町の対比、さらに「割れ殻」になった與四郎、同じような状況から免れえないであろう町の対比という、多層的な解釈が可能になる。言い替えば、一葉は女性の悲しい状況に重ね、恋う人に拒絶され、崩壊し、割れ殻になっていく、人の悲劇を男性と女性の側から描いたように思



える。藪禎子（二〇〇三）は対談の中で、（一葉は）自分の創作活動が続けて行く中で、男にも語りたいものがある、訴えたいものがあるということが見えてきて、これらを総合化、相対化して作品に盛り込んでいった、「にぎりえ」の源七も「十三夜」の録之助も明らかにその系譜にある、「われから」は、それを更に構造化に取り込んでいくように思うと述べている。菅聡子（二〇〇三）もこれに同意する形で、一葉の一連の作品で「われから」がいちばん興味深い、出世というようなことから疎外された男性がどのようなプレッシャーを受けるか、抑圧を受けるかということ、男性・女性双方の視点から書いているというあたりなど、一葉の作品がそれこそ女語りではあるが、同時に、まさしく両性にわたるジェンダーの問題を含んでいるところなのかと思う、と応じている。この視点の豊かさこそ、一葉の小説解釈の多義性を生み出しているものである。

前節では、『われから』の物語構造をめぐる様々な論議を紹介したが、この物語の題名から推測すると、『われから』は世の人の声に弄ばれた美尾と町、割れ殻となって崩壊する與四郎と町の物語であるというような多層的な読みをすることができる。しかし、私たちはそうした多様な解釈の中に、必ず「町」という名があがってくることに留意したい。つまり、一方の読み方からすれば、美尾、そして與四郎という名は弱まるが、町の名はどのような解釈にしても必ず残り、多義性の中から浮かび合ってくるのだ。『われから』では、いくつかの主題が薄氷のように重なることにより物語という結晶を織りなす、またその語りは多様な語り手の視点から創り出されていく。しかし、その表現技法の多層性を超えて、なお一葉がめざしたものがあるはずである。結論から言えば、本稿では、それが「町」ではないかと考える。さらに、女主人公「町」の物語が両性にわたるジェンダーの視点から描かれているかどうかは、さらにこの物語のテクストを読み込んでいく必要がある。続く四節、五節では、町の言語行為、與四郎の言語行為を中心に、物語に現れる多様な言語行為を辿り、その多層性の収斂する先を見極めたいと思う。

## 四 町と恭助の物語における言語行爲

物語は、町が霜のおりる寒い夜、それも真夜中、一人寝付かれず夫恭助の行方に思いをめぐらす場面から始まる。暖をとろうと引き寄せた火鉢に火の気はなく、黒いまま冷えた炭もある。この黒いまま冷え切った炭は町自身の状況を暗示しているかのようである。町は、牡猫を恋いてなく雌猫の玉を呼びに、縁側に出る。恋狂いの猫の鳴き声を「身にしむような媚めかしい聲」と町は感じる。ぬば玉の漆黒の闇は物の区別もつかぬほど夜の庭を覆っているが、その時町の眼は僅かな一条の光を見逃さない。そして、町はそれが書生部屋から漏れる光だと思ふが、漆黒の闇の中でそう判断できることから、町が普段から書生部屋に注意を向けていることがわかる。

霜の降りる冬の真夜中に「踏むにも冷たき板の間」の冷たさと廊下の恐ろしい闇をもとめせず、町は書生の部屋に立ち入る。一家の主婦に、しかもしんと冷えるわたる真夜中にこうした行動をとらせる背後には、彼女の強い意志、そして書生への関心が必要だろう。寝所の炭は火の気がなかったが、町は千葉の部屋で炭をつぎ、螢火は町の思いを象徴するように「ばちばちと言う音いさましく、青き火ひらひらと燃え」る。町は書生の世に頼る人のない孤独の境遇を自分と引き比べ、語る。「何事も黙って年上の言うことは聞く物」と書生に羽織を与え、自分は真冬の冷氣の中を寝間着一つで帰って行く。この時間を一葉は、町の雪灯の「蠟燭いつか三分の一ほどに成りて」と記す。短いとは言えぬ時間を町は書生の部屋で過ごしたのである。書生は二十歳を少し過ぎたくらいの若い男性。町は二十六歳では、自ら年上とは言っているものの、自分が、書生と同じ年ぐらいにしか見えないことは十分承知している。町のこうした思い切った行為は雌猫の「身にしむような媚めかしい聲」がきっかけとなり、これに導かれるように起こっている。そして、一葉は町の心情を投影するかのように炎を描く。炭の火は町の自分の寝間では冷たく、気配さえなかったが、書生の部屋では螢火から音をたてて青い火が燃え立つのである。

町と恭助が相添いてから十余年、恭助はもうすぐ四〇になろうという年頃である。結婚当時、町は十五、六、恭

助は三十ぐらいの年齢である。町の朝風呂の贅沢と、「あれは新橋か、何処ので有らう」と美貌を褒める人々の声を喜び、いつしか好みも粹筋の好みとなってゆく。そして、美尾物語を挟んで、町の夫恭助への思慕が語られる。

花見、月見に旦那さま催し立て、共に連らぬる袖を楽しみ、お歸りの遅き時は何處までも電話をかけて、夜は更くとも寐給はず、餘りに戀しう懐かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、如何なる故ともしるに難けれど、旦那さま在しまさぬ時は心細さ堪へがたう、兄とも親とも頼母しき方に思はれぬ。左りながら折ふし地方遊説などゝて三月半年のお留守もあり。湯治場あるきの夫れと異なれば、此時には甘ゆる事もならで、唯徒らの御文通、互ひの封のうち人には見せられぬ事多かるべし。

地方遊説で久しく会えない時など、町は恭助と人に見せられないような甘い言葉の文をやりとりする。しかし、恭助には既に飯田町に波という女性を囲っており、二人の間には男の子がいる。町の語りが恭助への甘い思いを語るほど、彼女の悲劇は際だってくる。結婚して十余年たった今、男の子は十一歳になっている。十二月十五日に奉公人の噂話から聞くまで町はそれを知らない。そして、町に未だ子はない。秋が深まり、落葉の霜の朝を迎える。時雨の宵、町は奉公人を集めて世間話をさせ、褒美をやる、語り手は「一口口に言わば機嫌かひの質なりや」と語る。「一口言心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛ゆう、車夫の茂助が一人子の與太郎に、此新年旦那さま召おろしの斜子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり」。しかし、町は母に捨てられ、父にも顧みられず、言わば親からの愛情が欠落した育ち方をしている。親の愛を知らない町は狂うほどに恭助に愛情を向け、兄とも親とも慕い、そして監視する。気まぐれな、どこか歪曲した愛情もこうした町の特異な生育背景から来ているとすれば、納得できる。一葉の見事な人物造形である。神経が鋭敏な町の性質は様々な挿話で冷静に語られる。贅沢と思

いながら、朝風呂なしではいられない習慣、相添いて十年たった今も変わらない恭助への一途過ぎる愛情表現、恭助が遅いときは「何処までも電話をかけて、夜は更くるとも寝給はず」。恭助が芸者を寵愛していると思いを巡らす町は、自分の身の回りの調度、化粧、衣装などを、芸者好みで揃えてしまう。最後の癪を起こして苦しむ壮絶な場面に至るまで、一葉は町の精神的破綻の複線をそこかしかに巡らす。そして、冒頭の千葉に掛けてやった羽織の件も思わぬ波紋を広げていく。しかし、町をこうした恐ろしいまでの不安に追い込んだのは、親の愛の欠如だけではない。むしろ、恭助の自分に対する思いにその不安が起因することが明らかになる。

続く場面は、十一月二十八日。恭助の誕生日である。盛会だが、胸の動機の苦しくなった町は酔いを覚ますために、一人稲荷の賽銭箱に腰をかける。庭のたたずまい、木枯らしの音も昔そのまま、町は夢のような心地がする。振り返って、背後の稲荷を見たその時、彼女はおそろしい寂寥感に襲われ、胸のどこからともなく、苦しさや心細さが湧きあがる。

散会の後は時雨になる。寝間に入った町は例に似合ず、様子がおかしい。酔いを覚ましていた時に「私は變な變な、をかしい事を思ひよりました」、「何うも何とも一言はれぬ氣持に成ました」と下を向く。恭助の泥酔した目にも、膝に涙をこぼす町の姿が映る。町は「例に似合ず沈みに沈んで」、それがいつ恭助に捨てられはせぬかという不安から来る寂しさだと語る。

私は貴郎のほかに頼母しき親兄弟も無し、有りてから父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに肝の種とて寄せつけも致されず、朝夕さびしうて暮しましたるを、嬉しき縁にて今斯く私が我まゝをも免し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿體ないほどの有難さも、萬一身にそぐなはぬ事ならばと案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあられぬほどの情なさより、言ふてはならぬ

と存じましたれど、遂ひ此様に申上て仕舞ました、夫れは孰れも取止めの無き取こし苦勞で御座りませうけれど、何うでも此様な氣のするを何としたら宜う御座りますか、唯々心ばそう御座りますと打なくに

恭助はそんな町の様子をいつもと違ふと思ひながら、愜氣であらうと可笑しく思う。恭助が町を案じている氣配はない。しかし、物語は町の予感通りに事が進む。町は神経質なほど感受性の強い、見て聞く人である。書生部屋から漏れる一条の光に気づき、酔いを覚ました夜は、一瞬で月の明るさ、社の奥の古鏡のひかりを捉え、たびたび風や雨の音を氣にかける。松風の音も逃さない。また、町は、渡辺澄子（一九九四）が指摘するように、政治家の夫と政界の事、文界の事など話せる知性を持った女性である。すなわち、鋭敏に觀察し、察知するだけでなく、それを分析する力も町は備えていることになる。<sup>(注5)</sup>

一方、恭助はこの物語の中で二度だけ、町に視線を向ける。一度はこの誕生会の夜に、泥酔した半睡の目で、もう一度はこの養子のことを切り出す際の町の顔色を窺うために。恭助の視線が町を追っていないことは明らかである。そして、沈みに沈み、心を振り絞って涙をこぼす町を見ても、恭助は案じるどころか、町の話や筋の通らないもの、愜氣だらうと可笑しく思う。恭助は町を見ていないだけでなく、案じることもしない。最後の別離を言い渡す時も恭助の町を無視する行為は繰り返される。

しかし、語り手が執拗に語るように町は恭助を追ひ続けている。その鋭敏な目は、具体的な事実までは捉えられないが、「夫れは夫れは押え處の無いお方」と恭助の嘘は無論、心の奥底に潜む町との離別という思いを見抜いたのではないだろうか。そして、その恭助の心の闇に眠る残酷な企ては、町を恐ろしいほどの不安に追い詰めるのに十分すぎるほど強いものであったのだ。

一葉は『にぎりえ』でお力の狂氣を描いた。町は恐ろしいほどの不安を抱え、やがて激しい癪を起こすなどの神

経障害に陥っている。不安は、明確な対象を持たない恐怖を指し、その恐怖に対して自己が対処できない時に発生する感情の一種であるが、一方自分を守るために出す、心理的な警告とも考えられる。その不安が強過ぎると心理的障害を起こす。突然、強いストレスを覚え、動悸、息切れ、めまいなどの自律神経症状が現れ、また空間認知等の情報収集が過剰に行われることもあり、強烈な不安感に襲われる。激しい動悸、呼吸困難等で錯乱状態に陥り、死ぬような恐怖感を覚えると言う。町の状況はこの不安障害の状況にびたりと当てはまる。

町の不安定な精神を一葉はなおも綴っていく。恭助の誕生会の頃から町は、晴れる空も曇りのように、時雨ふる風の音は人来て扉をたたくように感じ、奉公人に埒もない恋の話させ、自分も物語の主人公のように激しい恋をする気分になったと記される。町の不安定な内面が窺える。奉公人の福が町におもしろ可笑しく千葉の幼い恋物語りを聞かせる。福は千葉のかつての思っているというに話を落ち着け、町の歎心をおおうとするが、この時千葉は夫の恭助さえ目に止めない、町の不安定な様子を見抜き、注意を促していることに注意したい。

昨日の朝千葉が私を呼びまして、奥様が此四五日御すぐれ無い様に見上げられる、何うぞ遊してかと如何にも心配らしく申しますので、奥様はお血の故で折ふし鬱ぎ症にもお成り遊すし、眞實お悪い時は暗い處で泣いて居らつしやるがお持前と言ふたらば、何んなにか貴嬢吃驚致しますて、飛んでも無い事、それは大層な神経質で、悪くすると取かへしの付かぬ事になると申まして、夫れで其時申しました、私が郷里の幼な友達に是れく斯う言ふ娘が有つて、肝もちの、はつきりとして、此邸の奥様に何うも能く似て居た人有つた、

ここで私たちが気づくのは千葉の鋭い観察力である。福の言葉にある町の鬱病を、夫の恭助は恬気と軽くないなしだが、誕生会に稲荷の社の前で酔い覚ましをして以来、町はおそろしい不安に悩まされている。そして、田舎者、

無骨者であるはずの千葉はいち早く町の異変に気づいているのだ。それは、計らずしも千葉の目が町を追っていることを言い表している。また、福は町が鬱病であることを察知し、そして千葉が奥様を案ずる様子を話せば、町の機嫌を買うことができることを十分承知している。つまり、町は自分自身も気づかない不安定な精神、千葉への関心を福に看破されているのである。

さらに不安で壊れそうな町を徹底的に打ち砕くような出来事が起こる。十二月十五日、大掃除の采配をして、疲れた町は二階の小間にひっそりと身を横たえる。その時、奉公人の福と安五郎の噂話が聞こえてくる。福は、飯田町のお波が事を知らないのは、奥様お一方、知らぬは亭主の反対だねと言う。安五郎は、飯田町の様子を福に語る。玄関が開くと、坊ちやんが先立で駆け出して来る、お波の様子を「髪の毛自慢の櫛巻で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけで」、恭助が無沙汰をした、免るせと詫び、入口腰をかけると、波が駆け下りて靴をぬがせる、これが見とも無いほど睦ましい様子だ、自分たちにも煙草代を渡す氣遣いをするが、素人の生無垢の娘あがりで、恭助とは十何年の中で、坊ちやんが歳もことは十歳か十一にはなろう。話は町のことに及ぶ。此處の家には一人も子寶が無いのだから、「行々を考へるとお氣の毒なは此處の奥さま」、この家も先代の與四郎がしぼり取つたものだから、人の物に成つてもしかたあるまいが、此處の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて彌々根が張らうと、安五郎は続ける。奉公人たちは恭助の冷酷さを既に見抜き、町の行く末も冷静に分析している。

町が身の回りを芸者好みの設えにしてきたのは、恭助の関心が芸者にあると思ひ込んで、それに張り合う氣持ちもあったであろう。しかし、飯田町の波は妖艶な町とは正反対につつましく清楚で、世間的な氣働きのできる女であるらしい。見たことがないほど、二人は睦まじく、しかも十一になろうとする男の子が居ると言う。しかも、それを知らなかったのは自分一人なのだ。予感があったものの、狂わしいほど慕ってきた恭助は十余年の間、見事に自分を欺いてきたと知った町の驚きと悲嘆はいかばかりであつたろう。ただでさえ、神経が細かく、敏感な町であ

る。それを知った時、町は一気に暗黒の奈落の底へ突き落とされ、身も心も崩れ落ちる衝撃を感じたはずである。しかし、一葉は筆を控え、一文のみを添える。町は、わがままで、子供っぽく、軽率な女性だと表現されるが、この時の町は叫ぶこともせず、ただ身を臥す。「奥さまは唯この隔てを命にして、明けずに去ねかし、顔みらるゝ事愁らやと思しぬ。」

翌日、十二月十六日の朝、町は新聞を読む恭助と差し向かいになる。恭助は男の子の養子のお話を切り出す。町は恭助の顔色を窺いながら「何なりと思し召しのままに」と安らかに言うが、あの男の子のことではと情けなく思ひ、それが顔に出てしまう。恭助は芝居のことなど持ち出し、いかにも思ひやりのありそうな言葉を並べる。町は夫の密事を切り出すことができない。町の愁ひた様子を目にとめ、恭助は自分は清浄無垢だと嘯く。飯田町のこと、町が知る由もないと確信し、町を案じることはない。先に触れたように、恭助は物語の中で二度、町に視線を向ける。誕生会の夜と、この養子のお話を切り出す際に、町の顔色を窺う。誕生会の夜も恭助の町を見る視線に愛情は感じられなかったが、ここでも自分の都合しか考えていない。町の怪しい様子を見ても、町を氣遣わないどころか、飯田町の嘘はばれまい、清廉潔白と言い放ち、得意げに髭を捻る。町を心から心配する千葉と対照的である。

町は様々に思い煩うようになり、仰け反って苦しむ、激しい癪の起こる癖がついてしまう。今にも絶え入るばかりの苦しみ、日毎夜毎に度重なる。力ある手でよく押へてもらうために、町は千葉を呼立てる。千葉は反りかへる町の背を押さえ、さするが、武骨一遍律義男の身を忘れての介抱は、人の目にあやしく映る。人々は乱行あさましいようにひそひそ声で噂し、町が霜夜に書生部屋を訪れた、羽織の一件も添えられる。さらに、噂話に拍車をかけたのが福である。奥様は福がねらっていた本結城を新年着として千葉に遣わす。福の「其恨み骨髓に徹りて、それよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉らへて珍事唯今出来の顔つきに、例の口車くる／＼とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん」。語り手は、悪意を持った福に噂をさせることで、この噂が



歪曲されたものであること、事実とは異なっていることを巧みに表現している。

たった一人頼りにしていた恭助に裏切られた町が、真心を持って接してくれる千葉を心にとめ、心の支えにしたことは想像に難くない。町と千葉の間に実事があったかどうかという論議があるが、怪しい醜聞に彩られてはいるものの、語り手は「武骨一遍律義男の身を忘れての介抱」とのみ記す。ここには武骨一遍律義男の千葉が一心に町を介抱したことだけが記されている。一葉が使った、武骨一遍律義男という表現からは、自制力を持ち、正直で誠実な、町への恩義だけを感じている田舎出の青年の姿が思い浮かんでくる。巧妙に町をだまし続けた恭助の視線は町を見ていないが、いち早く町の病状に気づき、案じている千葉は、恩義を感じている人妻の町を破綻の瀬戸際に追い込むような行為は避けるであろう。語り手は念押しするように付け加える。「かねてぞ千葉は放たれぬ、汨羅の屈原ならざれば、恨みは何とかこつべき。大川の水清からぬ名を負ひて」。屈原は王に忠誠を尽くしながら、讒言によって追われ、国を憂いて入水した忠君愛国の人だが、語り手はこの屈原に千葉を重ねている。屈原は自らの煩悶を叙事詩「離騷」に詠んだが、千葉はどのようにその思いを嘆けばよいのか。町の側には千葉を求める気持ちかなかったとは言えないが、千葉が清廉潔白であることは物語の語り手の語りから明らかであろう。

さらに、千葉が町を介抱したことが噂になり、噂は恭助の耳に届く。悩み抜いた恭助が実際に別居を言い渡すのは四月になる。なかなか別居を言い出せないと言い訳めいた恭助の独白が記される。「今日は今日とは思ひ立ちながら、猶其事に及ばずして過行く、年立かへる朝より、松の内過ぎなばと思ひ、松とり捨つれば十五日ばかりの程にはとおもふ、二十日も過ぎて一月空しく、二月は梅にも心の急がれず、(中略)今とは思ひ断ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ」。しかし、町が奉公人の話から恭助に妾と男の子がいることを知ったのは十二月十五日で、翌一六日には恭助と向かい合っている。町が糺を起こすようになったのは、その後である。そして、恭助は年内に町との別居を決め、それを告げていることを考えている。千葉が町を介抱するよう

になり、十日前後で恭助は既に決断している。まさしく好機を逃さぬとばかりの瞬時の決意である。

しかも、恭助は町に罪がないことを認めている。「我まゝも其まゝ、氣随も其まゝ、何かはことごとしく咎めだてなどなさんやは。金村が妻と立ちて、世に耻かしき事なからず」。しかし、それをこのままさし置くのは「内政のみだれ世の攻撃の種になり」、「浅からぬ難義現在の身の上にかゝれば」と心配する。そして、自分としては忍びないが、「親しき友など打つての勸告」にどうしようもなかったと、友人に責任転嫁をする。谷中に町を幽閉する家の用意をし、準備万端整えた上で、「此處へと思ふに町子が生涯あはれる事いふはかりなく、暗涙にくれては我が身が不徳と思しゝる筋なきにあらねど」と、町が哀れで泣き、自分の不徳もあるとは思つたものと、思いやりのある言葉を付け加える。しかし、この時点では町の幽閉は決定的であり、別居は秒読みに入っている。恭助は、妻に罪がないことは明らかだが、世間体のため、友の勸告もありやむなく別居を決めたと言っているが、自身は年内に十日前後で素早く別居の決断をしており、不徳という言葉はあるが、飯田町の家庭のことを悔い、やましく思う表現はない。そして、恭助の独白では、別居の言い渡しに際して悩むものの、別居自体を取り消そうという迷いは感じられない。

一葉は「花ごもり」で自分自身をごまかそうとさまざま言い訳をし、幼なじみのお新から去り、金持ちの令嬢を選んだ世之助の語りに同じような手法を用いている（大河内晴美、一九九四、笹川、一九九八、参照）。恭助は、町の別居を言い渡すにあたって、いかに自分に思いやりがあったかを語るが、その言葉は言い訳に彩られている。その語りは責任転嫁をし、自分の利己的な気持ちを覆い隠すためのものである。恭助の独白とは裏腹に、恭助に町を思いやる心が全くないことは、最後の場面のすぎる町を「不埒者」と振り切り、なおもすぎる町を見ようとせず、「もう会わんぞ」と突きつける冷酷な言語行為に表現される。

町の声は、二階の小間で崩れ落ち伏して以来物語から遠のく。町の声が再び立ち上がってくるのは、最後の別離

を言い渡される場面である。忙しく車を整えさせる気配がし、恭助は言うべきことがあると町を呼ぶ。町は「今さら恐ろしうて書齋の外にいた」。自分がひどい癪を起こし、介抱してくれた千葉が家を追われたこと、それを恭助が快く思っていないであろうことを町は承知している。しかし、町が想像したような厳しい小言ではなく、突然の別離の言い渡しであった。町は「それは餘りのお言葉、我に悪き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞きませぬ」と言つて泣く。恭助は飯田町の波と十歳の男の子のことは露見してないと確信しており、断固たる態度を崩さない。そして、町と千葉の間に実事があったとも信じていない。ここで、恭助の念頭にあるのは町との別離をどう理由づけるかという事のみである。そして、袖にすがる町を「放さぬか不埒者」と振切る。町の言語行為は最後の場面で急変し、激しい怒りが表現される。しかし、恭助は町を突きのけ、その視線は町を捉えることはいない。

お前様どうでも左様なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すて、此家を君の物にし給ふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨て、御覽ぜよ、一念が御座ります」とて、はたと白睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。

町の言葉の強さは、不義の汚名を着せられた女性の行方、その先に横たわる暗澹たる闇を思う時、物語全体を貫くほどの鋭さで深く胸に突き刺さってくる。彼女がどんなに強い意志を持ったとしても、明治という社会はその正義と女性の心身を踏み砕いたであろう。そして、その意志が強ければ、強いほど、町の悲劇性も強まってくる。一葉は、この最後の場面に理不尽さ、残酷さ、そして心を絞るような町の声を壮絶なまでに描いたが、美尾物語と重

ねていくと、町の悲劇はさらに深く沈痛なものになっていく。

## 五 與四郎と美尾の物語における言語行為

町物語の恭助に町への愛情を語る言葉は見られないが、美尾物語では。美尾が與四郎への恋心を語る一文がある。「身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく、六疊、四疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て、いつぞや四丁目の薬師様にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしい白魚のやうな指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりし物なれども」。

與四郎が美尾を可愛がる様子も尋常ではない。十七歳の美尾を「天にも地にも二つなき物」と大切に、役所帰りに夕飯の菜の物を買って帰り、朝は水瓶を掃除して、美尾が一日手桶を持たないようにと水を汲んでおき、「貴方お昼時で御座います」と美尾が言えば、「おい」と答えて米を量り出す「惚ろさ」と語り手は描写する。美尾に対する與四郎のような愛情表現は、恭助のそれには見いだせない。安五郎の「見たこともないほど仲睦まじい」という言葉から、恭助の愛情は波に向けられていたであろうことがわかる。

しかし、幼なじみだった與四郎と添い遂げた美尾の初々しい恋心は世の人の心ない褒め言葉にかき消されていく。町は「あれは新橋か」という人々の賞賛の声に有頂天になったが、美尾に投げかけられる言葉は、美貌の賞賛と貧しさをあざ笑うものであった。美尾の貧しさを悲しく、情けなく思う気持ちは、花見で豪奢な様子の華族の一行とすれ違ったことで決定的となる。美尾は「はかなき夢に心の狂ひてより、お美尾は有し我れにあらず、人目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを戀ふると無けれども大空に物の思はれて、勿体なき事とは知りながら與四郎への待遇きのふには似ず、うるさき時は生返事して」というような様子である。怒る與四郎に「お氣に入らぬ物なら離縁して下され、無理にも置いてとは頼みませぬ、私にも生れた家が御座んする」と言い返す美尾。箒を振り回して

「出て行け」と叫ぶ與四郎に、美尾は「此處を死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何となりして下され」と泣いて、袖に取すがりて身を悶える。與四郎は、流石に美尾の悲しげな様子が胸に迫り、「もとより憎くは有らぬ妻の事」、離別はただの威嚇、我が儘なやつめ、心を許しているからこそその駄々だろうと許し、「可愛さは猶日頃に増るべし」。町物語の最後の場面でも、妻が夫に離別を言い渡され、袖をとってすぎる行為が見られる。しかし、町の手は「放さぬか不埒者」と冷たく振切られ、恭助は町を突のけてあとを見ず「町、もう逢はぬぞ」と言い放つ。離別を言い渡す夫に袖にすがる妻という行為が繰り返されるわけだが、妻の同じ行為に対する夫の反応は対照的である。冷酷な恭助の行為が際立つように作者は意図しているかのようである。

美尾の様子はそれからも怪しい。「ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審さ。與四郎心をつけて物事を見るに、さながら戀に心をうばゝれて空虚に成し人の如く、お美尾お美尾と呼べば何えと答ゆる詞の力なさ、何うでも日々の義務ばかりに送りて身は此處に心は何處の空を徜徉らん」。美尾は、一見町と同じような不安定な精神状態であるように思える。しかし、美尾はまるで恋に心を奪われたようであるが、貧しさを嘆き恨むという理由がはっきりしている。むしろ、美尾の様子を不審に思い、仕事さえも休んで、美尾の側を一時も離れなくなる與四郎は、理由のはっきりしない不安にとらわれる。「いよく眞に其事あらばと恐ろしき思案をさへ定めて美尾が影身とつき添ふ如く守りぬ」。しかし美尾の浮気の気配はなく、物思いしじみと泣いたかと思うと、勉強して、出世してほしいと、暮らしの貧しさを並べ、心から泣く。與四郎は「我れは懶惰者の活地なしだと大の字に寐をべつて、夜學はもとよりの事明日は勤めに出るさへ憂がりて、一寸もお美尾の傍を放れじとする」。美尾の傍らを一時も離れないという與四郎の行為は、恭助の行方を追って、どこまでも電話をかける町の行為と重なる。しかし、こうした諍いの中でも美尾に「貴郎斯うなされ、彼あなされ」と言われれば、「お美尾お美尾と目の中へも入れたき思ひ」を抱き続ける與四郎である。

與四郎が同輩と梅見に出かけたその留守に、実家の迎えという金紋の車が来て、美尾は一晩家を留守にする。一葉は「金紋」の一言で、それが貧しい実家から来るはずのない、裕福な主から差し向けられたものであることを端的に言い表わす。美尾は母の急病という言い訳をし、夫婦は睦まじく語り合うが、語り手は「與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき」と意地悪く付け加えるのを忘れない。恭助にも飯田町に妾の波と男の子がいるという秘密があり、町はそれを知らない。ここにも二つの物語に、思い人の秘密に気づかず、ひたすらに相手を思うという物語構造の呼応を見ることが出来る。しかし、美尾の密事は朦朧として涙の中で語られるが、恭助のそれは現実的で、十一歳の男の子の存在もあり、いきいきとして、明るく、仲睦まじい様子が語られる。恭助の飯田町の家が幸せそうな様子は、美尾の境遇と比べると、より鮮やかになり、そして町の悲劇はより深く、悲痛なものになる。

そして、梅の頃、金紋の車が来た頃より、美尾の物おもひは静まり、良人を諫めもしなくなったが、鬱々と日を送り、実家に頻繁に通う。美尾は吐息をつき、食も細くなって、体を横たえることが多くなり、顔も青白くなる。與四郎は病氣ではないかと心配する。「與四郎限りもなく痛ましくて、醫者にかゝれの、薬を呑めのと倍氣は忘れて此事に心を盡しぬ。」一方、恭助は町の体調が普通でないとしてとつても、軽くない。町の体調を心から心配していたのは書生の千葉であった。

美尾の不調は妊娠であった。與四郎は子を授かったことを夢のように嬉しいと感じ、人には言わないが、産み月の十月を指折り数えて待ち、冷静を装いながら、安産守りをあれこれ取り揃える有様だった。母親は安月給の與四郎の月給をやり玉に挙げ、当分夫婦別れして、美尾を子ぐるみ引き取ろうと言い出す。與四郎は「馬鹿婆が、何のやうに引割かうとすればとて、美尾は我が物、親の指圖なればとて別れる様な薄情にて有るべきや、殊更今より可愛き物さへ出来んに二人が中は萬々歳、天の原ふみとゞろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視下して、放れぬ物に我れ一人さだめぬ。」つまり、美尾の気持ちに離れているのを知らないのは與四郎一人であった。この

時、美尾の母は與四郎を出世せよと責め立てるのではなく、別離を進めている。既に美尾は出世を口にしなくなっており、母親の言葉への反論も見られない。美尾の気持ち、身の処し方は決まっていたのであろう。また、美尾をたきつけ、利用したかもしれないが、美尾は母を頼りにしている。しかし、町は守ってくれるはずの夫から幽閉別離を言い渡され、唯一町をいたわってくれた書生の千葉は屋敷を追われる。美尾と比べると、町の心の闇の深さは底知れない。

明くる年の春になり、町は高笑ひするやうになる。しかし、美尾は「日々に安からぬ面もち、折には涕にくるゝ事もある」が、これは血の道のせいと言い、與四郎は特に物も疑わず、子の話ばかりをし、勤めを続ける。そんな時、美尾の母は從三位の軍人様が、西の京に栄転し、そのお屋敷の女中頭として勤めることになる。老後も見てくれると言うことであると「舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ」。美尾の母は「人の口入れやら手伝いやら」をしなから、糊口をしのぎ、お齒黒がまだらになった齒を出して皮肉を言うような、だらしない老女である。そうした一介の貧しい老女が軍人様のお屋敷の「女中頭」に取り立てられる、しかも老後まで養ってもらえる約束でというのは、老女の口先だけの話にしる、不自然である。その裏には美尾を巡る取引があったと考えるのが順当であらう。

一方、美尾は町の産後、時折涙を浮かべる。一葉は自分自身の出産体験はないものの、小説の中で、若い母親を造形し、彼女たちは「可愛い、いとしい」と子を抱きしめる。この時の美尾も子を愛する母親の系列と言えよう。既に、與四郎との別離を決めているが、生まれた子がいかに可愛く、捨てるのは忍びがたいと美尾のせつない思いを一葉は描いたのであろう。町の誕生に際して、語り手は「誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分ねども」と語る。この思いは、美尾、そして後の與四郎の思いであつたろう。そして、美尾が町を残していった理由もここにある。軍人様の元へ行っても、彼は同じ疑惑を抱いて、その子を見つめるであらう。そして、その子の存在は、美尾と母親の障害になるやもしれない。それよりは、町を可愛がる與四郎の元へと決意し、美尾は母の旅立ち

から越えて一ト月、町と與四郎の元を去る。美尾の出奔をめぐる、美尾の自発的な行動（藪禎子、峯村至津子、一九九五）とする論と、母のためにしかたなく出奔した（渡辺澄子、一九九四、大畑照美、二〇〇一）とする論があるが、本稿では町が生まれるまでの美尾は、贅沢な生活を手に入れるため自発的に軍人様に身を寄せる決意をし、それは揺るがなかったが、町が生まれ、美尾は町の可愛さに出奔を先延ばしにしたと解釈したい。

越えて一ト月、雲黒く月くらき夕べ、美尾は唯一言を記した文を残して出奔する。最後の文には新紙幣が二十枚も重ねられ、母親として町への思いが添えられる。「美尾は死にたる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をとの願ひに御座候」。與四郎は紙幣と文を見るなり仰天し、胸には大波の立つ如くだが、なにか子細が有るのだろうと狂うように、其文を開く。與四郎の怒りは「忽ち顔の色青く赤く、唇を震はせて悪婆と叫びしが、怒氣心頭に起つて、身よりは黒煙りの立つが如く、紙幣も文も寸断／＼に裂いて捨て、直然と立ちしさま人見なば如何なりけん」というように凄まじいものとなる。立てし與四郎は、この後赤鬼となって死灰のごとく人生を終える。一方、町は夫の飯田町の家の事を知った直後、「奥さまは唯この隔てを命にして、明けずに去ねかし、顔みらるゝ事愁らやと思しぬ」と臥したまま。動けない。しかも、美尾には出奔という事実があったが、町には明白な罪はなかったのである。ここでも、一葉は対比によって、町の悲劇をより鮮やかに描き出す。いずれにせよ、與四郎は生きる活力が残っている。しかし、最後の場面では、夫に刃向かった町だが、この当時の女性が與四郎のように立ち上がり、面をあげて、人生に刃向かってゆく力を持つのは至難の技であったことは言うまでもなからう。一葉は同じ悲劇を男性である與四郎の側と、女性である町の側から描いたが、こうしたジェンダーを超えた視点から物語を描いてなお、女性の弱さ、不合理な立場を認識し、町の物語を書かざるを得なかったのではないだろうか。



## 六 収斂する多層的言語行為

ここまで、町と與四郎の言語行為を、中心に読み込んできた。ジェンダーという枠組みから見ると『われから』は美尾と町の物語になるが、多くの先行研究で指摘されている通り、町は與四郎であり、美尾は恭助である。

さらに、不思議なのが、物語を流れる時間である。この『われから』に流れる時間について、関口礼子（一九八六）は、物語の時制という点から美尾と町の物語に言及している。関口は、町の物語は現在から、過去、大過去（美尾物語）に遡行し、現在に戻る、美尾の物語自体も現在から、過去、大過去へと展開され、現在に戻ると述べている。一葉が物語構造に心を砕いていたであろうことが浮かび上がってくる。そして、実際に小説で美尾が語られる時間と町が語られる時間は、美尾物語の方がやや短いというものの、ほぼ等分である。しかし、物語を流れる時間は大きく異なる。町の時間は、恭助の誕生日である十一月二十八日、大掃除をする最中に奉公人の話から恭助に妾波と男の子がいるという事実を知る十二月十五日、そして恭助から養子のお話を持ち出される十二月十六日、町に癪が起こり、書生の千葉がそれを介抱することで、噂が広まる暮れの二週間ほどの時期、恭助が別居の言い渡しを迷うのが元旦の前後、実際に言い渡すが四月、町物語で語られる出来事は十一月末から十二月末のほぼ一ヶ月間に集中している。恭助は千葉の二週間にも満たない介抱を別居の理由としている。

これに対し、美尾物語は結婚後の四年目の年、春雨はれての後一日、どこかの華族の贅をつくした一行を見て、ため息をつくようになり、與四郎に財力ある身分に出世することを懇願する。次の年の春、梅咲く頃の與四郎の留守に金紋の車でどこかに出かけ、桜の頃におめでたが分かるようになり、十月に子供が生まれる。まず、美尾の母親が軍人の女中頭となり西国に行き、次の年の一月、雲暗く月暗き夕べに美尾は置き手紙をして、與四郎の元を去る。二年という長い時間が流れていることがわかる。

與四郎と美尾が相添ったのはほぼ六年で、最後の二年間の時間は別離へと向かっていく。これに対し、町と恭助

は十余年連れ添った後、たった一ヶ月で破綻を迎える。一葉はなぜこのような時間構造を物語に仕組んだのだろうか。二つの物語を流れる時間の差を名づけるとすれば、美尾の物語は必然的であり、町の物語は偶然性が高い。美尾を慈しんでいた與四郎の別離には二年という時間が必要だったが、十余年間、町を欺いていた恭助には町と千葉の介抱騒ぎが囁かれた十日ほどの時間は別離を決意するのに十分な時間であったのだろう。恭助の冷徹さと、彼に愛情を一心に注いできた町の悲劇が浮き彫りになってくる。

加えて、與四郎は「死灰」のごとく生きたが、女性の町にはどのような可能性が残っているのだろうか。高田知波（一九九七）は「町の別居幽閉」という言葉を用い、この後、男の子（庶子）の相続とともに未来の戸主の母親として波の地位が安定するであろう可能性を示唆している。若い町は美しいまま幽閉され、「割れ殻」、すなわち生ける骸となる惨い運命が待っている。町が幽閉される谷中に、かつて美尾の母が住んでいた土地である。美尾の母親は「まだらに残る黒き齒を出して」皮肉を言う醜い老女として描かれている。恭助より若い町はおそらくは恭助が死んだ後も生き、かつて住んだ家の風評を聞きながら「割れ殻」のように老いていくのだろうか。そして、私たちは與四郎の悲痛な状況と比べてなお、町の悲劇はさらに壮絶で、未来の闇が深いことを知る。

一葉は、恋う人に捨てられるという悲劇を與四郎、町という両性の立場から描くことによって、ジェンダーを超えた視点から『われから』という物語を描いた。物語では、美尾と町の物語、與四郎や恭助、美尾の母親、福、千葉、奉公人たち、名もない人々、そして物語の語り手と多様な言語行為が重なり、ポリフォニー（多声性）を生み出している。本節では、対立、拮抗、調和など、さまざまに蠢く言語行為を読み込むことで、その多層性を顕在化する試みをしてきた。しかし、その複雑な言語行為が幾層にも重なる物語からは、やはり町の悲劇が浮かび上がってくる。そして、美尾物語でさえ、町の悲劇を前景化するための舞台背景となっている。言い替えば、この物語に込められた様々な小主題、多様な言語行為は町という女性の悲劇へと収斂していくのである。一葉は『われから』

ら』に至るまで、ジェンダーの問題を、間接的言語行為、忍従を強いられた女性からの裏切り、身体性の反転など、さまざまな位相で試みている。そして、「貧と富」という社会的不合理、罪なき世の人の残酷さ、裏切りと誠実、心の奥深くに潜む不安の闇など、種々の主題を物語に組み込み、物語の多元的な空間を創り上げたが、そうした多元空間から立ち昇ってくる、一人の女性の悲痛な叫びは私たちの胸をとらえて離さない。

## 七、おわりに

本稿では、物語に散りばめられた様々な位相の言語行為を解釈し、この物語で一葉が書こうと意図した主題を探ってきた。一葉は同じ主題の物語、美尾と町の物語を重ね、男性である與四郎の側と、女性である町の側から、恋う人に捨てられた悲劇を描いたが、ジェンダーを超える視点をとってなお、女性の弱い立場、社会の不合理をかざるを得なかったのではないかと分析した。また、『われから』をめぐるもう一つの論点、町と千葉の間の実事については、物語の語り手の文章から、町は千葉に関心を持っていたが、千葉は無骨一辺倒律儀男として町を案じ、町に仕えたと考えた。

今後は膨大な草稿や、「世の不合理」に言及する『一葉日記』等の資料を併せて検討することも必要であろう。

さらに、一葉の作品群全体を架橋するジェンダー観の展開を視野に入れると、『われから』に込められた意図を別の視点から探ることができよう。一葉は、言語行為のレベルで、間接的にジェンダーを反転し、あるいは身体性を反転するなどの表現技法によって、ジェンダー構造を顕在化する試みを行っている。<sup>(47)</sup>そして、そうした間接表現に飽きたらず、『うらむらさき』で夫を欺き、若い男性に走る人妻の物語を描く。一葉が、男性のする行為を女性に当てはめ、世の人に分かるような直接表現でジェンダーの問題を語り出したことがわかる。さらに、『われから』を一葉作品に於けるジェンダー構造の展開という点から分析することによって、一葉が最後の作品に込めたもの、

併せて一葉作品を架橋するジュンダー観の構造をとらえることができるかと考える。これらは、将来の課題としたい。

### 《注》

(1) ポリフォニー (polyphony) とは、複数の異なる動きの声部 (パート) が協和しあって進行する音楽。ただ一つの声部しかない「モノフォニー」の対義語として、多声 (部) 音楽を意味する。ミハイル・バフチンは『ドストエフスキの詩学』で、ドストエフスキの小説を、その登場人物が多面性を持ち、解釈の主体として振舞い、時には、独自の思想の主張者として振舞うことで、人物相互の間に「対話」が成立し、現実の多次元的・多視点的な表現が可能になっていると述べた。樋口一葉の作品について、前田愛 (一九八二) は「多声的」「声の重奏性」を指摘し、小森陽一 (一九八六) は語り手が「女中」たちの「こゑ」と同じ位相にある、家の内部の潜在的外部としての言葉を語る、としている。なお、一葉はドストエフスキの作品を翻訳で読んでいる。

(2) 一葉はこれまでの作品で物語構造にこだわり、創作意図をそこに込めている。例えば、『にぎりえ』は五蘭盆会の廻り灯籠のように場面転換を行い、『たけくらべ』は主人公の心の動きに添って、活発な夏から寂寥感に包まれた冬へと移る。また『十三夜』では主人公の境遇に添い、場面が下から上、上から下というように変化する。

古典でも四季の変化に添うように、主人公の気持ちの変化が描かれるが、一葉はそうした伝統を踏襲していると言われる。『われから』研究も、一葉がこの複雑な物語構造に込めた意図をめぐって展開されている。

(3) 美尾や町の造形を、井原西鶴、近松門左衛門の『大経師昔暦』のおさん、あるいは近松の『鐘の権三重帷子』のおさるに求め、また場面の着想は、古くは猫がきっかけとなる源氏物語の女三宮と柏木の恋、あるいは町が女中たちの恋物語を胸を轟かせながら聞く時雨の夜話の場面を、源氏の雨夜の品定めの場合面に比される。源氏物語

では猫の手綱が御簾を跳ね上げ、無防備な女三宮の姿を露わにする。そして、柏木は女三宮への激しい思慕に悩む。

(4) 他に「君を猶うらみつるかなあまのかる もにすむ虫の名を忘つゝ（拾遺和歌集十五恋閑院大君）」「あなたを猶恨んでしまふ。海女の刈る藻に住む虫の名（われから）」を忘れてはいるのに」なども町の行く末の心情を思い起こさせる。

(5) 榊敦子（一九九六）も森鷗外の『願』を言語行為、発語媒介行為から分析し、主人公玉の洞察力、分析力を描きだしてみせた。

(6) 慶應義塾大学病院の情報サイトKONPAS、Wikipediaの不安障害の項目等を参考にした。

(7) 一葉は『花ごもり』『やみ夜』『たけくらべ』等でジェンダーの反転という視点から発語行為を描いている。そして、『十三夜』、『にぎりえ』、『軒もる月』等で社会の不合理とそのために深く悩む女性の心理を描いた。また、『わかれ道』では大きな女と小さい少年という形でジェンダーの身体的な反転を行い、『裏紫』ではこれまでの間接表現ではなく、実際に男性の行動をする女性を描いていく。

#### 〈参考文献〉

- 青木一男（二〇〇三）『『われから』——人妻物語への試み』『国文学解釈と鑑賞第六八巻五号』  
 大畑照美（二〇〇一）『『われから』論——母と美尾、美尾と町子』『近代文学研究第一八号』  
 五島慶一（二〇〇一）『〈妻〉の「一念」——『われから』における妻の位置』『三田国文』  
 坂本成親（一九五七）『『われから』』『国文学解釈と教材の研究第二巻一一号』  
 榊敦子（一九九六）『行為としての小説——ナラトロジーを超えて』新曜社

笹川洋子（一九九八）『ジェンダーの視点からみた『花ごもり』『やみ夜』『たけくらべ』の言語行為について―見  
つめる女たち、うつ向く男たち』『親和國文三三三号』

笹川洋子（二〇〇五）『言語行為から読む『にこりえ』試論…お力の苦悩と愛における心的二重性をめぐって』『親  
和國文四〇号』

笹川洋子（二〇〇六）『十三夜』試論 ジェンダーと言語行為をめぐって』『親和國文四一号』

笹川洋子（二〇〇七）『わかれ道』における身体性と言語行為の構図―反転するジェンダー』『親和國文四二号』

笹川洋子（二〇〇八）『軒もる月』をめぐる言語行為―心の「影」の世界への眼差し』『親和國文四三号』

笹川洋子（二〇〇九）『うらむらさき』における言語行為の意味』『親和國文四四号』

塩田良平（一九六八）『樋口一葉研究増補改訂版』中央公論社

重松恵子（一九九二）『樋口一葉『われから』論―母娘の物語が指向するもの』『近代文学論集第一八号』

菅聡子（二〇〇三）『座談会…樋口一葉―これまでの、そしてこれからの』『国文学解釈と鑑賞第六八巻五号』

関礼子（一九九七）『物語としての『われから』』『語る女たちの時代―一葉と明治女性表現』至文堂

関口礼子（二〇〇二）『われから・校注』注釈『樋口一葉集』岩波書店

千田かをり（一九九三）『『われから』における言葉と身体』『立教大学日本文学七一号』

高田知波（一九九七）『〈女戸主・一葉〉と『われから』』『樋口一葉論への射程』双文社出版

滝藤満義（一九九八）『一葉文学生成と展開』明治書院

趙恵淑（二〇〇七）『女性の無力―『われから』』『樋口一葉作品研究』専修大学出版局

塚本章子『樋口一葉『うらむらさき』・『われから』―『カネ』と『モノ』と『女の欲望』』『近代文学試論四七  
号』

戸松泉『われから』試論―〈小説〉的世界の顕現―『国文学解釈と鑑賞第六〇巻六号』

前田愛（一九八二）『都市空間のなかの文学』筑摩書房

峯村至津子（一九九五）「『われから』論（上）」『国語国文第六四卷三号』

峯村至津子（一九九五）「『われから』論（下）」『国語国文第六四卷四号』

渡辺澄子（一九九四）「一葉文学における新たな飛躍―『われから』論」『樋口一葉を読みなおす』学芸書林

藪植子（一九九一）「『われから』論」『透谷・藤村・一葉』明治書院

藪貞子（二〇〇三）「座談会・樋口一葉―これまでの、そしてこれからの」『国文学解釈と鑑賞第六八巻五号』

山田有策（一九九五）「『われから』―與四郎の復習」『国文学と鑑賞第六〇巻六号』

湯地孝（一九二六）『樋口一葉論』至文堂

和田芳恵「われから・校注」『樋口一葉集』角川書店

#### 〈資料〉

『樋口一葉集』角川書店

『樋口一葉集』岩波書店

『樋口一葉全集』筑摩書房